

特集記事

2020年 新春トップセミナー

2025年 大阪・関西万博がめざすもの

公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会 事務総長 石毛 博行氏



講師の石毛 博行氏

●はじめに

ご紹介をいただきました万博協会の石毛博行でございます。本日は新春トップセミナーの席で大阪・関西万博についてお話しする機会をいただき、感謝を申し上げます。私にお声かけをさせていただいたのは更家さんだと承知していますが、更家さんは私がJETROの時代から大変お世話になったわけであり、JETROもまさに大阪生まれでして、1951年に当時の大阪経済界によって設立されたものであり、

石毛 博行氏 ご略歴

1974年 東京大学経済学部卒
 1974年 通商産業省 入省
 2002年 大臣官房総括審議官
 2006年 中小企業庁長官
 2008年 経済産業審議官
 2010年 経済産業省顧問
 2011年 独立行政法人 日本貿易振興機構 理事長
 2019年 公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会 代表理事、事務総長

今や非常に立派な機関になっています。また。本日は主催者である生産技術振興協会の堀池理事長、同協会の皆様にも感謝を申し上げます。本日は「今、万博はどうなっているのか、準備状況はどうなのか」についてお話をさせていただきます。

●BIE総会（パリ）

私は昨年11月末のパリのBIE総会で大阪・関西万博の準備状況を加盟国の皆さんに報告したのですが、最初にその時に使った動画を見ていただきます。5分弱のもので、英語で恐縮ですが、今からお話するキーワードがいろいろと出てくるので、ご覧いただきたいと思います。

（動画上映）

スライドは、BIE総会の様子です。総会では、私と前経団連会長で現在は万博担当大使の榊原さんとが準備状況の説明をしました。各国から非常に高い評価を受けましたが、これは行けるなという実感よりも、恐らくそれは今まで5回もの万博を成功させてきている、日本に対する信頼感に基づいていると思っています。

●EXPO2025 Osaka Kansai Reception（ドバイ）

パリでのBIE総会の後、ドバイに向かい、ドバイ万博の代表者会議に参加し、大阪・関西万博のPRをしてきました。これはドバイでのレセプションの様子ですが、その時に国際協力担当大臣でドバイ万博公社・総裁のリーム・ハーシミー大臣と面談をしました。素晴らしい女性の大臣で、彼女から「ドバイ万博には192カ国が参加するが、これから万博運営の失敗ごとも含めてドバイの経験を共有し、全面的に大阪・関西万博に協力したい」という力強いコメントをいただきました。折角の機会ということで、私どもの協会とドバイ万博公社との間で協力覚書を締結しました。これによって、ドバイ万博の経験をフルに共有できる体制を整えたわけです。



● 2020年ドバイ国際博覧会 工事進捗状況

せっかくドバイまで行ったので、2020年10月開幕の万博会場がどうなっているのか、建設現場を見てきました。広さは約450haと夢洲の3倍、千里での大阪万博の1.5倍くらいになります。このスライドは会場の全体図ですが、パビリオンの工事進捗状況が示されています。今見ていただいているのは工事が進んでいる場所です。そして日本館ですが基礎工事を終え、骨組みができてつきました。しかし会場全体の様子は、まだこれからという雰囲気が充満していました。万博の関係者からは「これで本当に間に合うのか」といった不安の声も聴かれるくらいです。ただ万博の事前状況というのは、大体こんな感じであるし、今までのケースでは何とか間に合っているし、UAEも開幕には間に合わせてくれるでしょう。

1. 万博とは？

●国際博覧会（万博）とは

ここからは過去の万博を振り返りながら、私たちの万博についてお話します。今年が2020年東京オリンピックの年。関西と違って東京で話をしていると、オリンピック一色で、万博のことを話題にする人はほぼいません。メディアの取り上げ方も、関西と東京ではこんなに違うのかと感じます。ただ歴史的に見ると、オリンピックは万博の付属物であることは間違いのない話であります。1900年の第2回オリンピックはパリで開催され、水泳はプールでなくセーヌ川で行われました。このオリンピックはパリ万博の付属物として開かれたもので、パリ万博は政府が巨額な予算を投じて、今でも立派に残っている「グラン・パレ」などの会場を整備して行われま

した。まさに国威発揚や殖産興業そのものであります。それが時代を経る中でだんだん様子が変わってきたわけです。万博は条約に基づき国が主体となって開催される国家事業。オリンピックはIOCという民間団体が、都市と共催して開催される、いわば民間主体のイベントです。日本では過去5回の万博が行われているわけですが、「2025年大阪・関西万博」は、1970年の「大阪万博」、2005年の「愛・地球博」と同じように、5年に1回の大規模な登録博という位置づけになっています。最近では2010年の「上海万博」、2015年の「ミラノ万博」、2020年の「ドバイ万博」が登録博に当たります。その間にいくつかの万博が開催されていますが、それらは大規模な博覧会ではない認定博覧会という扱いになっています。

●万博は社会が変わる大きな転換点に

1970年の大阪万博をきっかけに普及したものは数多くあります。人間洗濯機は今も普及していませんが、ファストフード、電気自動車、動く歩道、ワイヤレステレホンなどは、70年万博がきっかけとなって多くのものやサービスが広がっていきました。万博は社会が変わる大きな転換点、きっかけとなったといえると思います。2025年には何が出てくるのか、未来を変えるのは何なのか、今後出てくると思いますが、まだ今は研究している段階であります。

●1940年幻の万博から1970年万博へ、引き継がれた思い

過去を振り返ると、じつは1940年に東京万博（紀元2600年日本万国博覧会）が構想され、準備が進んでいました。「幻の万博」であります。1938年の閣議で、日中戦争の長期化に伴い万博開催の延期を決めたわけです。当時の商工省担当課長であった豊田雅孝さんが戦後に国会議員になり、「日本もそろそろ万博をやる時期ではないか」と提案され、1970年の万博開催につながったのであります。ちなみに、豊田先生に根回しをしたのは堺屋太一さんだという話であります。この幻の東京万博に関してはいろんな整備が行われていて、例えば勝鬨橋はこの万博のために整備されたものだったそうです。

2. 今、なぜ万博なのか？

●近年の万博の傾向

今、なぜ万博なのかについて少し触れたいと思い



ます。1970年の大阪万博は大成功であったわけですが、実は万博そのものは大きな課題に直面していきましました。万博は一体どんな意義があるのかという疑問が持たれるようになりました。2000年に開催されたハノーバー万博（ドイツ）は「人間・自然・技術」というテーマを掲げて行われ、4,000万人来場の予想を立てて進めたのですが、来場者数は1,600万人。大きな赤字を残したそうです。万博の業界は、これは大変、こんなことでは万博は成り立たないと、次に行う2005年「愛・地球博」（愛知万博）では大変なテコ入れを行い、しっかりした見通しを立てようとBIEもサポートし、日本もがんばりました。当初の見通しは2,500万人でしたが、目標を下げて1,500万人としました。現実には2,200万人の来場者があり、収支面でも黒字となりました。それによって世界の万博業界が救われたとも認識されています。「愛・地球博」が成功して、その後の上海万博、ミラノ万博、そしてドバイ万博へとつながり、万博は世界の共通の課題に挑戦する場として、復活しつつあるのではないかと私は思っています。

●なぜ今、万博なのか

そして2025年、「大阪・関西万博」ですが、なぜ日本で万博なのでしょう。その答えの1つは、今年のオリンピック・パラリンピック後の成長、大阪・関西の成長の起爆剤としての期待であります。もう1つは、世界は気候変動・地球環境問題、高齢化・医療の問題などに直面しているわけです。こうした共通する課題に人類としてどう取り組むのか。どう「地球の未来」・「人類の未来」をデザインするのか。それらを一緒に考えようというのが現在の万博ではないかと思うわけです。

3. どんな万博をつくるのか？

●登録申請書の概要

そうした観点からどんな万博を創っていくのか。開催国として、登録申請書を昨年12月末にBIEに提出しています。誘致申請書で提出した内容から少し変えています。テーマは同じですが、サブテーマは「いのちを救う」「いのちに力を与える」「いのちをつなぐ」とし、分かりやすく短い言葉で表現をしています。開催期間ですが、当初はゴールデンウィークから始まることにしていましたが、3週間ほど前倒しをして4月13日～10月13日という期間にしております。

●万博会場・夢洲

そして万博会場となる夢洲です。これは会場を上空から見た写真。夢洲から瀬戸内海につながっていく、関西につながる、アジアにつながる、そういう万博であります。とりわけ海の上で行う万博、海に囲まれての万博というのはかなり珍しく、大規模な万博では初めてのケースだと思います。

現在、夢洲は埋め立てが進んでいます。全体図のオレンジ色で囲んだ部分が埋め立てが進んでいる範囲です。

●夢洲へのアクセス

次に夢洲へのアクセスについてです。現時点で用意されているのは「夢舞大橋」と「夢咲トンネル」で、夢舞大橋は片側2車線から3車線に拡張する予定です。夢咲トンネルは現在、車両が通行しているのですが、トンネル中央部分に地下鉄が通るようにし、地下鉄中央線が延伸することになっています。計画来場者数は半年間で2,800万人、1日平均15.3万人。ピーク時には1日30万人近くの来場者を想定しています。ユニバーサル・スタジオが1日7～8万人のキャパシティで運営しているそうですから、相当多くの人数をここに運ぶことになります。アクセスが十分であるかどうかについては、現在検討いただいています。

●会場配置計画

会場の現時点での配置計画図ですが、3つのワールドに分かれています。グリーンワールド、パビリオンワールド、ウォーターワールドで、パビリオンワールドのゾーンに色々な建物が建ちます。ウォーターワールドのゾーンは水のまま残るので、ここはイベントなどを行う空間となります。グリーンワー

ルドの部分ですが、現在はソーラパネルなどがあるため、これをどう扱うかの問題はありますが、ここでもイベントなどを行っていくことになると思います。入り口は2つあります。計画図の赤い点線で囲まれた部分で、左側がバスでの来場者のための入り口、右側が地下鉄での来場者の入り口になります。パビリオンワールドの青い点線で囲まれた部分は、「空」と呼ばれる大きな広場になります。次のスライドに、空のイメージが示されています。夏の期間などの暑さ対策も進めないといけないと思っています。

●テーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」

テーマの関係について少し触れたいと思います。万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は非常にいいテーマだと思います。38億年前に地球上に「いのち」が誕生し、その命が今は人類、ホモ・サピエンスになってきていますが、我々人類は「他の生物のいのち」をいただいて生きているわけです。そうした中で日本では毎年大型台風がやってきます。オーストラリアでは日本の国土の半分くらいが消失するという山火事が発生しています。アメリカ・カリフォルニアでも同じことが起こっています。地球が傷んできています。地球が痛むということは人類のいのちにも関係してくるわけです。ただ単に人間の命ということだけでなく、もっと大きな視点から、「いのち」について考える必要がある気がします。

●サブテーマ「3つのLives」

サブテーマとして3つを掲げています。ここでは人間に焦点をあてて、1つは「Saving Lives (いのちを救う)」で、一人ひとりの「いのち」を守る、救うこと。1つは「Empowering Lives (いのちに力を与える)」で、一人ひとりの「生活」を豊かにする、可能性を広げること。1つは「Connecting Lives (いのちをつなぐ)」で、一人ひとりがつながり、コミュニティを形成して社会を豊かにすることに焦点を当てています。これら3つの「Lives」でサブテーマを提示しています。

●テーマを具体化する「フォーカスエリア」

こうしたメインテーマ、サブテーマを踏まえてどのように具体的に展示分野を理解していくのか。そのために登録申請書の中では「食の未来」「遊び・学び」「未来の産業」「AI・ロボット」「ライフサイエンス」「宇宙・海洋・大地」、そういった6つの展

示分野を「フォーカスエリア」として提示しています。そうしたものを参加する各国や企業の皆さんが見て、感じていただいて、どんなアプローチをするのか。それぞれの参加者の中で理解をしていただいた上で、取り組んでいただきたいと思います。企業の皆さんの側から見れば、①自らのパビリオンを設置する②協会が設置するテーマ館に参加する③会場インフラの設置をする④イベントを開催する—など、いろんな参加の仕方が考えられます。万博は誰かがやっていて、こっちは見に行くだけということでは多分うまくいかないわけでありまして。一人ひとりがこのようにしていくのだということ、より多くの皆さんに積極的に参画していただきたいと思う次第です。

●会場全体を「未来社会の実験場」に

万博の重要なコンセプトは「未来社会の実験場」(People's Living Lab)です。万博会場は新しいアイデア・技術を実証・実装する場所となります。1日当たり平均15万人が来場する場所です。半年間の壮大な実験の街となります。万博で得られるデータを使って、いろんなことができるのではないかと思います。グーグルのように街を買わなくても、万博会場で実験ができるという期待があります。

●People's Living Lab (PLL) 促進会議の設置

私たち万博協会では、昨年11月に「未来社会の実験場」を検討する場として「PLL促進会議」を立ち上げました。座長にはカーネギーメロン大学教授の金出武雄先生に就任していただきました。いろんなアイデアを社会実装するための仕組みについて、どのようにつくり上げていくのか、企業などからアイデアを出してもらおうとしているところです。具体的な検討テーマは、①会場設計②環境・エネルギー③移動・モビリティ④情報通信・データ⑤会場内エンターテインメント—などで、様々な観点から議論していただきます。昨年12月2日からアイデア募集を開始し、今月末が締め切りですが、現時点ですでに180件以上のアイデアが寄せられています。本日も午前中に第3回目となるPLL促進会議を開催したのですが、その中で「空飛ぶ車」の研究を進めている企業の代表者から説明がありました。聞いてみると本当に実現しそうです。すでに実現に成功している外国の企業もあるそうですが、2025年万博の時には、当たり前のように会場の空を飛ん

でいる可能性があります。もちろん規制の問題があるため万博会場周辺を特区にするなどの規制緩和が必要です。その辺りも含めて、促進会議では検討を進めているところです。

●SDGs達成に向け、共創を生み出す新しい「参加型万博」へ

PLL促進事業に加えて、もう1つの事業を進めています。大阪・関西万博は「SDGsを加速する」として誘致に成功したわけです。私たちは大阪・関西万博という晴れの舞台を目指して、世界中の人々が「私たちはSDGsに貢献するためこのような事業を進めている」というような、共創して紹介しあう場をつくらうと考えています。SDGs達成に取り組むムーブメントを起こしたいと思っています。そのために近々、SDGs達成に向けた「共創プロジェクト」を立ち上げます。万博の6カ月間だけでなく、万博に至る準備過程からSDGsに取り組む企業や大学、自治体、NPO、個人の皆さんによる組織を超えた共創を応援していこうと考えています。この共創による取り組みが日本全国、そして世界中へと広がり、2025年を目指していくような新しい「参加型万博」を実現したいと思っています。

4. 今後のスケジュール

●当面のスケジュール

ここからは今後のスケジュールについてご紹介します。昨年12月末に登録申請書を提出しました。これが承認されると、各国への参加招請が正式にできるようになります。そして今年秋か年内には、基

本計画（マスタープラン）を策定する予定です。この基本計画で重要な点の1つは予算であります。大阪・関西万博ではパビリオンなどの建設費を1,250億円と試算していますが、じつは愛・地球博が1,350億円でした。大阪・関西万博は20年前に行われた愛・地球博より少ない額が計上されているわけです。最近の大阪・関西での建設ブームで、資材や工賃も上がっています。加えて万博の成否は、どれだけ魅力的なものにできるのかにかかっており、その辺りも踏まえて現在、予算面についても見直しをしているところであります。

●プロデューサー体制、シニアアドバイザー制度

基本計画をつくっていく中で、プロデューサーを今年4月か5月頃までには選んでいきたいと考えています。ちなみに70年大阪万博では丹下健三さんや岡本太郎さんが担当されました。優れたプロデューサーは、万博成功のための必要条件となることから、しっかりと選んでいきたいと思っています。ここに示したのはプロデューサーの概念図です。今までの万博と同様に①会場デザイン②会場運営③式典などの行催事一の3人のプロデューサーが必要で、加えて今回は、6つのフォーカスエリアをそれぞれ担当するプロデューサーを置きたいと思っています。あくまで概念図ですので、どなたが引き受けてくださるのか、具体的な名前が入る段階でしっかりとした構成・仕組みをつくっていきたいと思っています。

そして万博に対し、専門知識や技術、経験を有する方々から具体的にアドバイスをさせていただくために、シニアアドバイザーを設置、ご覧のような方々



からいろいろなご意見を伺っているところであります。

●ロゴマーク

ロゴマークについて先日まで募集をしていました。応募総数は5,894作品。そこには大変な熱意が示されていて、良い作品が出されたと思います。今後、知財の調査、一般意見の募集を経て4月頃には最終選考を行いたいと考えています。ロゴマークは「万博のシンボル」として世界中から愛され、親しみの持たれるものになりたいと思っております。

●関西での55年ぶりの万博

今度の万博は関西での55年ぶりの万博となります。このビッグチャンスぜひ生かしていただきたいと思っております。私自身、今度の万博のキーワードは①中小企業②若者③おもしろいの3つではないかと思っております。3つの中でも特に若者です。先日のダボス会議でも、スウェーデンの17歳の環境活動家・グレタさんが、アメリカ大統領を向こうに回して堂々と論陣を張りました。そういう時代なのです。若い世代の人たちにぜひ頑張っていただきたい。70年の大阪万博の時のように活躍していただきたいと思っております。

●万博を世界・日本の次の時代をつくるきっかけに

70年の大阪万博は64年の東京オリンピックとともに、あの時代を大きく変えました。時代環境は変わったわけですが、日本は幸運にも2020年にオリンピック、2025年に万博という機会を得たわけです。2025年万博を、日本および世界の次の時代をつくるきっかけにしたいと思っております。デジタルの時代だからこそ、五感で感じる事が大事です。ぜひ現地に多くの人たちが来られることを期待しております。万博はその名が示す通り、世界の多くの国々が熱心に参加して初めて万博になるのです。1つでも多くの国々に参加をしていただいて、1つでも多くの企業に参加していただいて、そして1人でも多くの方々に万博会場に足を運んでいただきたいと思っております。

最後になりましたが、今度の万博は、まさに大阪・関西の「底力」を世界に示す貴重な機会だと思っております。皆様方の一層のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。ご清聴、ありがとうございました。



質疑応答

感想：70年大阪万博の時に私は「世界に1つしかない月の石」を見るために並んだが、今度の大阪・関西万博では「世界に1つしかないはやぶさ」を展示していただけたらと思っている。

Q：「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマだが、高齢者社会がハッピーになっていくのかという問いの一方で、その時に数が少なくなった子供たちが元気であるのだろうかと思われ。若者たちを巻き込む企画は素晴らしいと思うが、ユースによるユースのための企画が必要だろう。どのような形で若者たちの参加を考えていくのか？

A：若者に対する求心力を生み出すことはまだできていないと思う。誘致の段階では関西の学生がパリに行って、プレゼンテーションもやっていただいた。まだエネルギーとして盛り上がる状況にできていないので、これから本格的に取り組みたい。さきほど70年万博当時に活躍したデザイナーの名前を出したが、あの人たちはなぜあのようできたのかと考えると、各企業がパビリオンをつくり、展示をする中で彼らにその機会を与えたからだろう。PLL促進会議の場でも今の企業の状態を見つめながら、こういうことをしたいという話が出てきている。その中で新しいコシノジュンコ、新しい横尾忠則、新しい黒川紀章が生まれるような形をつくり上げたいと思っている。